



特集／外から「日本」を見直す／その2

Special Feature
Reframing
Japan
from
the
Outside

Part



「事例」

取材・執筆／脇坂敦史 撮影／栗林成城

奥深いからこそ革新的なアプローチもできる能

日本の伝統芸能のなかで、特に「能」を語る日本人が果たしてどれくらいいるだろうか。「世界最古」の古典演劇といわれる能には、実は奥深さだけでなく革新的な要素も多く存在している。そこで40年以上能を勉強し、仕舞舞士として指導を行うほか、英語で能を演じる演劇集団「シアター能楽」を立ち上げるなど、能を深く知るリチャード・エマート氏に、その歴史的な奥深さだけではない現代の能のあり方、英語能という画期的な試みなどについて伺った。



エマート氏が手がける新作英語能「ブルームーン」。
オーバー・テンフェイスにて、シテ方がつけるプレスリーの面と黒人の面(右上写真)。

リチャード・エマート

Richard Emmert

リチャード・エマート／1949年アメリカ生まれ。武蔵野大学文学部教授、喜多流仕舞舞士「シアター能楽」芸術監督。アーラム大学在学時に早稲田大学国際部に留学。さらに東京藝術大学で日本とアジアの伝統芸能の研究も行う。英語能の作曲、演出を数多く手がけ、1990年にはCD「英語能」も発売。現在は国内外で能のワークショップや公演など幅広く活躍する。

言葉ではなく、
まず身体でぶつかった
能との出会い

歌舞伎は観るけど能はちょっと……そんな日本人は少なくない。日本文化を代表し、その奥深さを象徴する芸能であることはわかる。しかし、能の魅力を説明しようとしてもうまく言葉にできない。そして、ろくに何も知ら

ないことに気づくのではないだろうか。

「歌舞伎と能の違いは、小説(散文)と詩(韻文)の違いと少し似ているかもしれないですね。小説の方がとつきやすいし、読む人も圧倒的に多い。今、詩集を読む人は少ないけれど、詩でなければ伝えられない、深い世界やニュアンスもあるでしょう」。そう語るリチャード・エマートさんは、アメリカのオハイオ州生まれ。日本で40年以上にもわたり能の仕舞や謡、囃子を学び、

あらゆる側面から能を実践してきた、

希有な人物だ。現在は、日本の大学で能を中心に日本とアジアの伝統芸能を教えるが、「シアター能楽」という演劇集団を率い、英語能の制作と上演も行っている。

「能を習っている、能を勉強している」と日本人に話すと、よく驚かれました。あなたがわかりますか?という反応です。たぶん、それは能のストーリーや謡(台詞や歌)が言葉として理解

できますか?という意味なのでしょう。けれども、能はただの台詞劇ではありません。たとえばオペラがそうであるように、音楽や所作、衣装など、感動したり理解したりする方法はひとつではないのです」

言葉よりも先に、まずは身体表現や音楽表現としての能の世界に飛び込んでいった。初めて「能を演じた」のは、初来日より前の1970年。早稲田大学とも提携していたインディアナ州の

アールム大学で受けた能のゼミで、英語能『聖フランシス』のシテ方(主人公)に抜擢されたのだという。

「振付はアメリカでも有名なモダンダンス。フルートによる笛の音もよく研究されたもので、能らしさを出そうと工夫していました。しかし今、振り返ると、あれが厳密に能と呼べるのかどうかはわかりません。私自身もその後、これほど能にのめり込むとは思っていませんでした」

2度目の来日を果たした1973年の秋、自身の演じた『聖フランシス』の記録映画を東京で観る機会があったという。そのとき、狂言方泉流の能楽師である野村万作氏のもとで稽古していたダン・ケニー氏から、東京で『聖フランシス』をやりたいと協力を求められたそう。

「やるなら、もつと能をきちんと習いたい！ 咄嗟にそう思ったのです。それから喜多流の松井彬先生のもとで謡と仕舞を習いはじめ、2年目からは笛や鼓も、それぞれの先生について習いはじめました」

能の世界を言葉として理解するより先に、まずは稽古に打ち込んだ。

「稽古が始まると、自分がやっていることに集中してしまうのです。どうすればすり足がきれいにできるか。どう体を動かすか。発声はどうするか。打楽器のリズムや掛け声のタイミングはどうするか……」。静かな、ゆったり

逆、30年後はどうなっているのか？ たとえば能では亡霊が登場することにより、そうした場所をめぐる深い記憶といったものを描くことができるのです。人間の深い「業」や「想い」といったものが、時空をこえて舞台上に描かれる。それは、どんな時代劇とも違う独特なものだという。能ならではのフレームと高度に抽象化された様式を用いることで、イラク戦争もエルヴィス・プレスリーも、まったく新しいものとして立ち現れてくる。

「現代英語を使っているので、こういうテーマも描きやすいのだと思います。日本でも古語だけでなく、もつと現代語を使った新作能に挑戦する人がいたらい。なかには古典だけで十分じゃないかという人もいますが、私はさまざまな新作がつくられていいと思っています。私が来日した当時は、新作能も数年に1曲しかつくられていませんでした。けれども、最近はそのが増え



©David Surinaki

「ブルームーンオーバー・メンフィス」は、米国ロックミュージシャンのエルヴィス・プレスリーが命日に邸宅クレイスランドを訪れたある女性が、プレスリーの亡霊(精神)と遭遇。美しい瞑想の世界が展開される。

りとした動きのなかにも大きなエネルギーを込めていく。そうした能の魅力に惹かれていった。しかし、日本の稽古事ならではの教え方や独特の流儀といったものに、違和感はなかったのだろうか。

「最初の頃、私とまったく目を合わせない先生もいて、ああ、外国人に慣れないのかなあ、と思ったことはあります。でも後で気がついたのは、その先生はどんな生徒とも目を合わせないということでした(笑)」。それぞれの先生の違いを個性として感じつつも、日本文化にはこういう特徴がある、といった大上段の解釈をあまりしないのが、いかにもエマートさんらしい。

自分のなかにある 生きた言葉で 能をつくりたい

能の稽古と並行して、さまざまな研究にも取り組んだ。なかでも、能の音楽的な側面に興味があったという。そして当然のことながら、ストーリーや歴史的背景、言葉そのものへの理解も深まっていた。

一方でエマートさんは、英語で能を演じたいという気持ちも抱き続けてきた。

「80年代から英語能をいくつか手がけてきましたが、どうしても納得できない部分がありました。英語のできる歌

能の稽古と並行して、さまざまな研究にも取り組んだ。なかでも、能の音楽的な側面に興味があったという。そして当然のことながら、ストーリーや歴史的背景、言葉そのものへの理解も深まっていた。

一方でエマートさんは、英語で能を演じたいという気持ちも抱き続けてきた。

「80年代から英語能をいくつか手がけてきましたが、どうしても納得できない部分がありました。英語のできる歌

てきた。さまざまな人が新作能を試みる時代になったのです」

能を含めた日本の 伝統芸能には もつと可能性がある

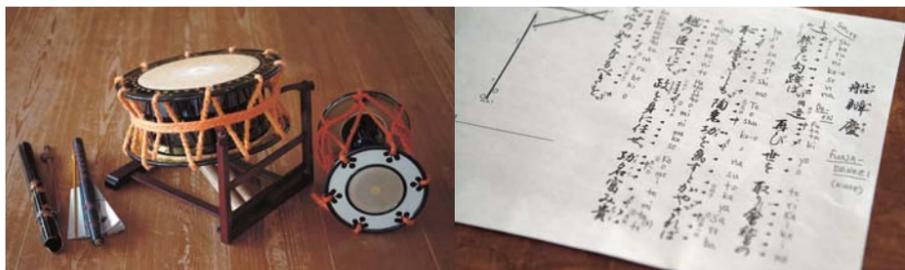
能は現在まで継承されている古典演劇として「世界最古」ともいわれている。数百年にわたり、新しいものを生み出す力と古いものを守る努力が、常にせめぎ合ってきたにちがいない。エマートさんの取り組みを知らなければ知るほど、ふたつの力のバランスを考えずにはいられない。

「明治時代から、日本の音楽教育は西洋音楽一辺倒になってしまいました。私の学んだ東京藝術大学でも、西洋音楽と日本音楽の割合はだいたい9対1。小学校から高校までの音楽教育では、さらに比率が高いでしょう。能だけではなく、日本の伝統芸能にはもつと大

きなポテンシャルがあると思っています。日本の伝統音楽を習得した先生が増えて、この割合が半分かそれ以上になってもおかしくはない」。2002年度から中学校の音楽の授業で和楽器を教えることが義務づけられたが、それでも、まったく足りないとも強調する。日本文化における基礎的な教養でもある伝統音楽の役割を、もつと見直すべきだというのだ。確かに能は、日本人にとつても「よくわからないもの」「難しいもの」かもしれない。それならなぜ学校で教えてくれないのだろうか。「かつて日本でも英語の先生が英語を讀めても、話せない時代がありました。今は話せる先生が当たり前になってきている。それも変わってきていて、おそらく英語教育は良くなってきている。音楽教育も、もつと伝統音楽を取り入れて、少しずつ良くなればいいと思います」

伝統は、守るか変えるかの二者択一ではない。英語能のような試みに対して、どこかそういった目でジャッジしようとしているのではないか。

「2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催が決まってから、どうやって外国人に能を紹介するべきか、相談されることが増えました。でも日本人自身が、能を含めた日本の古典芸能一般に対してもつと興味をもたなければ、本当のものを伝えることはできないでしょう」



外国人に教える場合、日本の古典能では台詞の読み方をローマ字で表記し、新作英語能の場合には特殊な三線譜の仕様にしている。工夫がされている。

エマート氏は、能を舞うだけでなく、能管(笛)、小鼓、大鼓、太鼓の演奏も行っている。

手を起用すると能でなくなってしまう、話のできる人がやると英語がだめになってしまう。能でありながら、英語として生きてくるものにしたかと思つたのです」。そこで、少しずつ外国人にも能を教えるようになった。2000年には外国人と海外在住の日本人による「シアター能楽」を結成。以来、数々の古典や英語能の公演を精力的に行っている。能は、翻訳の難しい詩(韻文)

のようなもの。だからこそ、自らの内に流れる言葉を生かして新しいものをつくりたいという気持ちが湧いてくるのだろうか。

「自分のなかで最初に流れている言葉というのは、やはり英語なんです。だから、英語で能をつくるのが純粋に楽しい」とあくまでも率直だ。

とはいえ、エマートさんの考える「英語能」の定義はかなり厳密でもある。単に能の雰囲気をもつた演劇というだけでは十分ではない。それが「能の技法や様式、舞、謡や囃子などによって構成された」ものでなければならぬ。「それでも、英語能という呼び名を嫌う人はいます。日本人のなかにも、外国人のなかにも、能は決して英語にならないと考える人がいるのです」

エマートさんが手がける英語能のテーマは、現代的で魅力的なものが多い。たとえば、トラウマを抱えたイラク戦争の帰還兵を描いた『Zahid Dates and Poppies(ナツメヤシとケシの花)』。あるいはミュージシャン、エルヴィス・プレスリーの孤独と心の闇を描いた『ブルー・ムーン・オーバー・メンフィス』など。

「能の特徴のひとつは、場所を描くということだと思えます。私たちは今、自分がいるところを自分の空間だと思つている。けれども30年前は、どうだったか？そこは昔どんな場所か、誰がそこにいて、何が起きていたのか？



Richard Emmert

では、エマートさんは、自身の英語能の意義や未来をどのように見ているのだろうか。

「英語能は何らかの形で能を知ってもらうきっかけにはなるでしょうが、もしかししたら、ただ能の影響を受けた英語劇で終わってしまうのかもしれない。私自身はもうすぐ死んでしまうかもしれないから(笑)、それはわからない」。確かに新作能は、つくることよりも、演目を受け継いでいくことの方が、ずっと難しい。長い長い能の歴史のなかで、私たちが見届けられる時間など、まさに舞台上の「幻」でしかないのかもしれない。それでも、古典として磨かれ、「完成されたもの」と思っていた能が、再びダイナミックに新しいものを生み出す場面に立ち会うことはできる。私たち日本人は能だけでなく伝統文化を知り、その可能性を広げることこそそる目を向けるべきではないだろうか。